

3. 源氏物語の注釈・講義録の文化資源化

はじめに

『源氏物語』の注釈書については、藤原伊行『源氏釈』（平安時代末成立）を嚆矢とし、以後、藤原定家『奥入』、素寂『紫明抄』、四辻善成『河海抄』、一条兼良『花鳥余情』、三条西実隆『細流抄』など、特に中世を通して多くの書が作られてきた。まずは歌壇の重鎮であった藤原俊成により、「歌詠みの（ための）書」として、その価値を意義付けられて以来、専ら『源氏物語』には、どのような歌が用いられ、作られ、表現されているかに、その研究の重きがあった。それが次第に「源氏」（臣下）から「准太上天皇」（皇族）に返り咲く主人公・光源氏のあり方が、没落していく貴族たちの心の拠り所となり、物語の内容は、歴史のあり方と等しいとする読み方（准拠）をも生み出した。

たとえば『河海抄』は、物語に描かれる桐壺—朱雀—冷泉朝について、明確に史上の醍醐—朱雀—村上朝の出来事・人物に依拠していると定義した。いわゆる延喜（醍醐）・天曆（村上）期を聖代とする延喜天曆準拠説である。このように、注釈書作成の営みは、雑穢語であった物語を「源氏学」という学問にまで高め、さらに古今和歌集と並ぶ、貴族文化の象徴へと導いていく。

このような注釈書による『源氏物語』の解釈は、言葉の意味を一義的に定めるという欲求とは裏腹に、その時代のイデオロギー、注釈者の思想を反映し、より多義的な解釈を生み出した。それらには、現代のわたしたちから見て、適切でないとされる内容もあるが、各時代の研究・学問のあり方、当時の人々の考え方を写す鏡として、今日の研究にも重要な示唆を与えてくれる。

明治大学日本古代学研究所では、江戸時代中期の『源氏物語』講義録である『源氏物語聞録』（湯浅兼通筆録／明和七年）と『花鳥芳囀』（土肥経平著／明和八年）を研究資料として購入し、これら古注釈書の研究とともに、文化資源化を進めた。近世の注釈書、しかも武士層の『源氏物語』享受のあり方を探るという試みは、物語テキストが当時の人々の「こころ」に与えた影響、また後世の人々が古代人の「こころ」に寄せる思いを汲み取り、双方向的に物語やそれを取り巻く社会のあり方を浮き彫りにすることを目的とした。また物語テキスト自体が含み持つ「こころ」の問題については、テキストに描かれる皇統のありようと、物語における表現の深化として「心の鬼」の語を検討し、「古代人のこころ」の様相について明らかにした。

（1）『源氏物語聞録』の特徴と文化資源化

江戸時代、徳島藩藩医であった湯浅兼通が講師から聞いて筆録したという『源氏物語聞録』は、明和七年（1770）の奥書を持つ。五冊九帖（第一冊「桐壺」「箒木」、第二冊「空蟬」「夕顔」、第三冊「若紫」「末」、第四冊「紅葉賀」「花宴」、第五冊「葵」）から成り、「桐壺」～「葵」巻までの注釈を収める。各巻の講義回数、桐壺七回（寛保元年九月十八日～十月十七日）「箒木」九回（十月十七日～十二月一日）「空蟬」二回（十二月七日・十一日）「夕顔」九回（寛保二年正月二十一日～三月一日）「若紫」十回（三月六日～五月一日）「末摘」六回（五月六日～六月一日）「紅葉賀」七回（六月十一日～八月十六日）「花宴」三回（九月一日～十月十一日）「葵」十回（十一月一日～二月十六日）であり、約一年半の間に計六十三回催されている。時に次の講義日まで長期間空くこともあるが、箒木巻からは日付に「一」と「七」が付く日、夕顔巻からは日付に「一」と「六」が付く日を概ね講義日として定期的に行われてい

る。

各写本は、縦27.5×横19.8センチで、表紙は藍色、題箋に外題を記し、扉には内題（外題と同じ）が書かれる。すべての表記は、基本的に漢字交じりの片仮名書きで、時に本文の引用は平仮名書きである。片面十二行に、物語本文の一部を引用し、それに短い棒線を付して注を付けるが、さらに頭注と巻末注が付される。

頭注は、注釈本文の補注と見られる注、講師との問答、「師曰」で始められる講師の説、「(書名) 曰」で始まる他書の説、「私考曰」と記される壺井義知の『源氏男女官職私考』の説、「兼道曰(按)」などで示される兼道自身の注釈が箇条書きで記される。巻末注は、桐壺巻から始まり空蟬巻からは「再問條々」と明記されており、「余再侍 華山那和君 受 其傳」と奥書にある通り、二度目の講義によって付けられたものとみられる。ただし花宴巻にこの注はない。

また書名については、『源氏物語聞書』と題する注釈書が数多ある中、管見の限り『源氏物語聞録』と題する注釈書は他に例がない。ただし似た書名の注釈書に『源氏物語聞記』がある。「録」の字は「書」や「記」以上に「そのまま書き写す」意が強いので、やはり奥書にある「毫モ不二漏脱一而筆-記ス」(いささかも漏らすことなく筆記した)の意を込めての書名であろう。この本は、地方武士特有の理解の仕方、貴族文化への憧憬が他書には見られない独自注となっている。(詳細については湯浅幸代「湯浅兼道筆『源氏物語聞録』について」日向一雅編『源氏物語注釈史の世界』青簡舎、2014年、参照)。

この講義録については、今回のプロジェクトにおいて作成した「古典籍資料データベース」(図Ⅱ-3-1)より、全画像を公開した。また翻刻についても、PDFでダウンロードでき、画像と翻刻を見比べながら、内容を確認することが可能となっている。



【 図Ⅱ-3-1 データベースのトップページ 】



【 図Ⅱ-3-2 図1の古典籍資料データベースアイコンから行ける頁 】



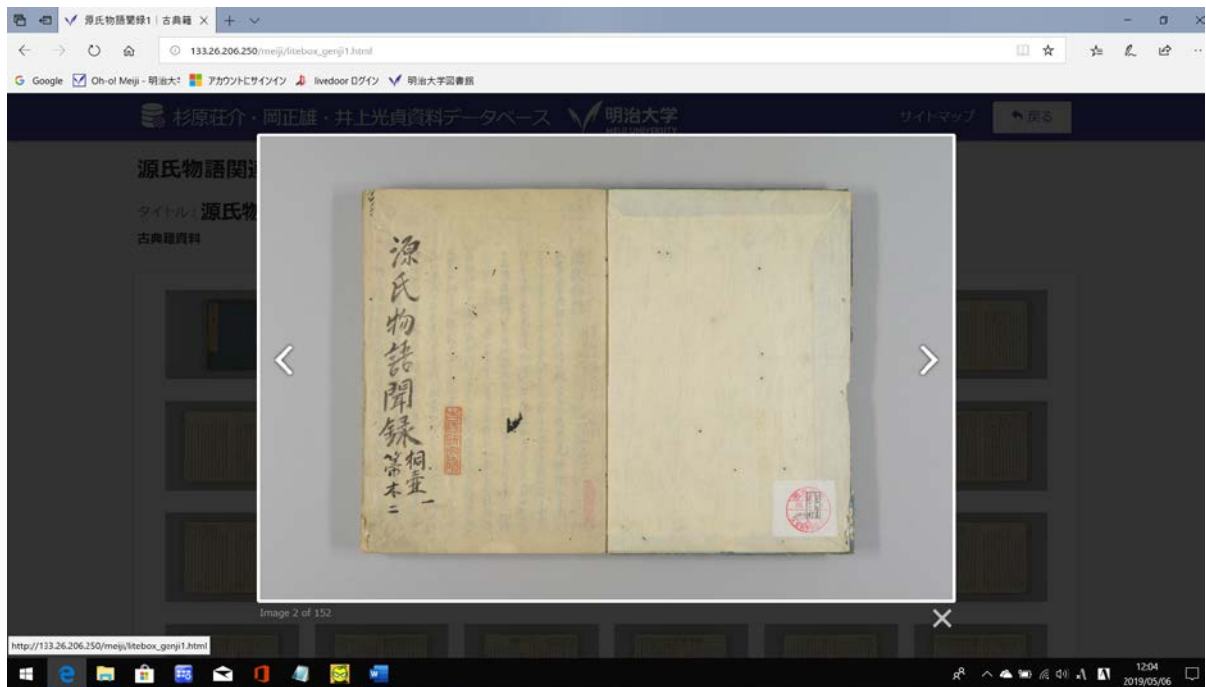
【 図Ⅱ-3-3 上記の「源氏物語聞録」アイコンから行ける頁 】



【 図Ⅱ-3-4 上記の画像アイコン（指先タッチマーク）から行ける頁 】
 各冊子から全丁の画像と翻刻（PDF＊ダウンロード可）を見ることができる。



【 図Ⅱ-3-5 上記の「源氏物語聞録1」の画像アイコンから見られる頁 】



【 図Ⅱ-3-6 上記の画像を拡大して見ることができる 】

(2) 『花鳥芳囀』の特徴と文化資源化

土肥経平著『花鳥芳囀』は、明和八年（1771）の奥書を持つ『源氏物語』の注釈書である。著者・土肥経平（1707—1782）は、備前国岡山藩の藩士で、同郷の儒学者・湯浅常山との「湯土問答」などで知られる有職故実家であり、和歌に関する著作の他、古典籍を多く書写している。経平の蔵書は、経平の記した秘函目録に凡そ千冊もの記載が見え、秘函に現存するものは、多く池田家文庫（岡山大学附属図書館）が蔵している。

『花鳥芳囀』についても、経平自筆本が池田家文庫に存在する。かつて、経平の蔵書を調査した蔵知矩「土肥経平に関する報告」（『国語と国文学』十二巻三号・五号、1935年3月）には、経平の著作（三十種ほど）が六つに分類され、その（一）国文学に関するもの、として『花鳥芳囀』が最初に挙げられており、経平秘函にある自筆本の他、もう一本が阿波国文庫にあると記されている。しかし現在、阿波国文庫の写本は存在せず、焼失したとされている。そのため、今回のプロジェクトで購入し、調査を行ったこの写本は、『花鳥芳囀』として現存する二本目の写本として、大変貴重なものである。

池田家文庫蔵『花鳥芳囀』については、三村晃功「『源氏物語花鳥芳囀』について」（『岡山高校国語』第三号、1967年3月）に詳しい内容の紹介がなされており、それ以前にも重松信弘『新攷源氏物語研究史』（風間書房、1961年）に江戸中期の『源氏物語』注釈書として紹介されている。しかし全文の翻刻はなされていなかったため、江戸中期における地方武士の『源氏物語』享受について、その一端を明らかにすべく、明治大学本『花鳥芳囀』について紹介し、翻刻の全文を『明治大学古代学研究所紀要』第23号（2015年度）に掲載した。

本書（一卷一冊）の形態については、次の通りである。縦23・7cm、横16・5cm。四つ目綴じ。表

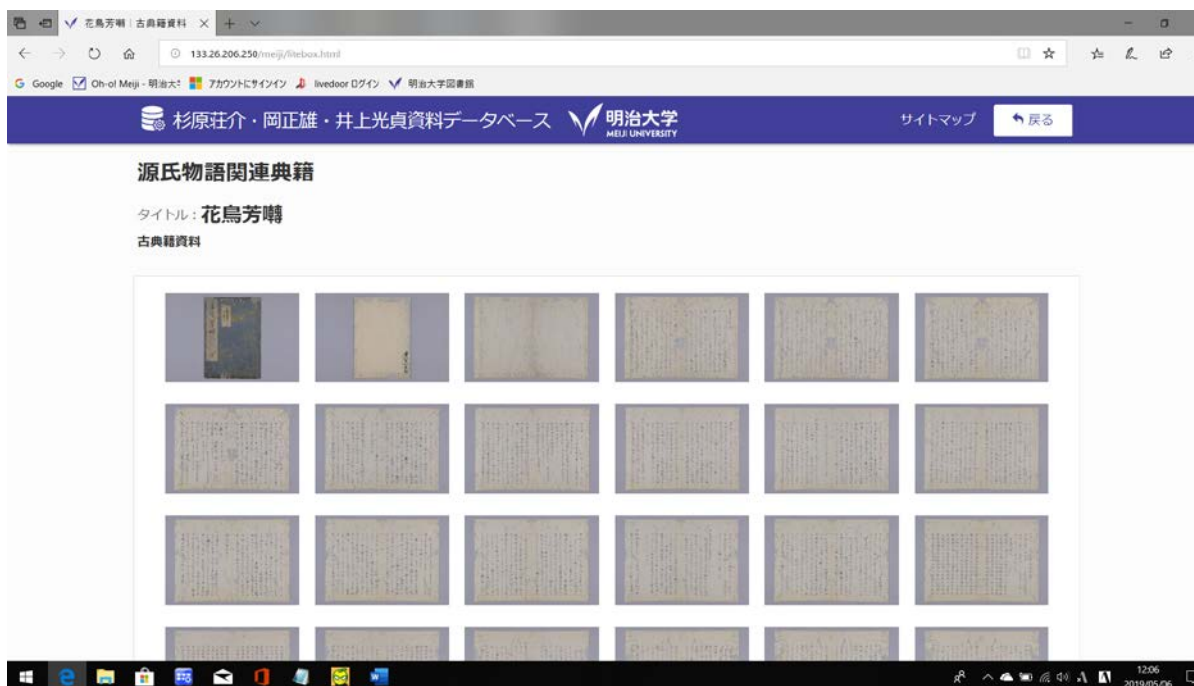
紙は藍色，金雲・金砂子散らし。下に千鳥を描く。外題は題簽（表紙左端）に「華鳥芳囀 全」とあり，その右側に「土肥経平 真筆」の貼紙がある（ただし池田家文庫が蔵する経平自筆本を複数実見したところ，別筆の可能性が高い）。また表紙見返し右下に文字があり，遊紙の後，五十四丁にわたって本文が記される。内題は「花鳥芳囀」。半丁十行書，一行十七～十八字詰。朱書などはなく，蔵書印もない。また四十丁表・裏に，それぞれ一枚ずつ貼紙がある（池田家文庫本は明治大学本と同じ二枚の貼紙の他にもう一枚貼紙がある）。奥書は五十五丁表に記され，本文と同筆である。

また保存状態が悪くなかったせいか，虫損がひどく，裏打ちを施して修補されており，翻刻にあたっては，虫損の箇所を中心に，国文学研究資料館初雁文庫蔵『花鳥芳囀』（昭和八年，西下経一氏による池田家文庫本の写し）を参照した。池田家文庫本についても後に実見し調査を行った。本文の比較については，校異表を作成し『明治大学古代学研究所紀要』28号（2018年度）に掲載した。

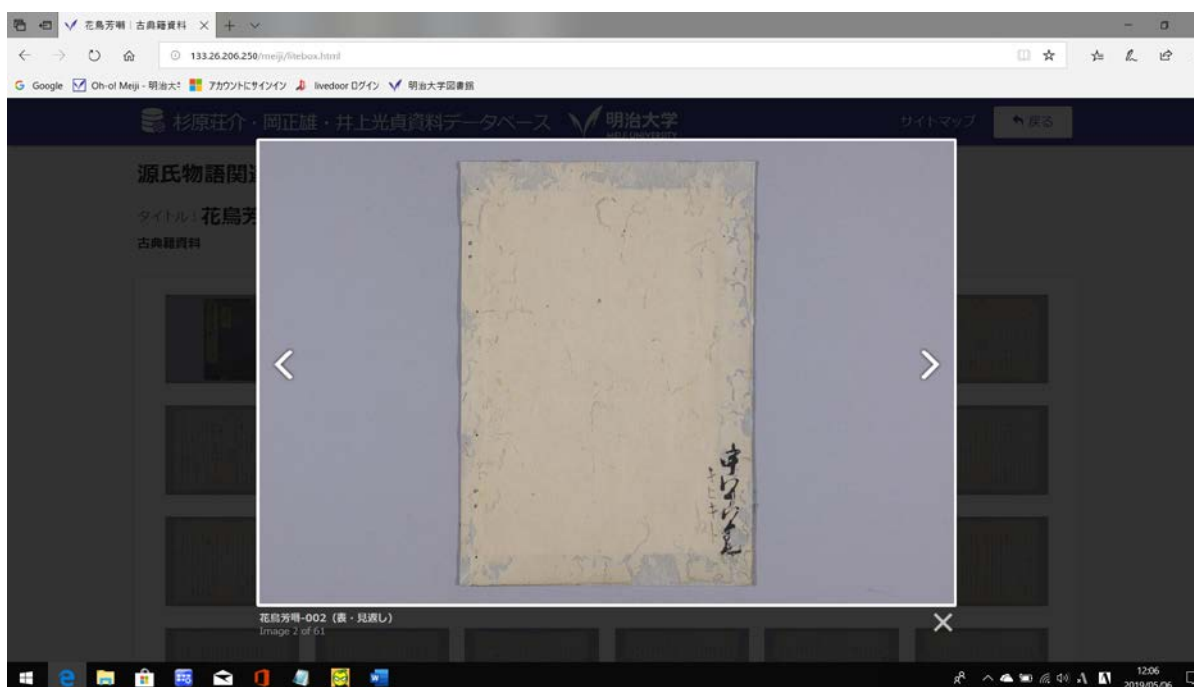
また『花鳥芳囀』の特徴としては，物語そのものへの興味より，それを元に議論する堂上への憧れ，和歌を実作することへの意識が強く，それが『花鳥芳囀』の個性となりえている。『源氏物語』の注釈書を著わした人々が，物語に様々な思いを投影してきたことは，先行研究で明らかにされているが，このように『源氏物語』を徹底的に実学の書として利用・解体することができたのは，やはり経平自身が武士の出身であり，物語そのものとは別のところに興味があったからと結論付けた。またそのような興味をもってしても，『源氏物語』は十分に価値ある書（歌詠みの勉強に役立つ書）として求められていたことを明らかにした。この点については，湯浅幸代「江戸中期の源氏物語注釈書・土肥経平『花鳥芳囀』について」（原岡文子・河添房江編『源氏物語 煌めくことばの世界Ⅱ』翰林書房，2018年）に詳述した。また，『源氏物語聞録』同様，「古典籍資料データベース」【図1】より，全画像を公開し，翻刻についても，PDFでダウンロードできるようにした。



【 図Ⅱ-3-7 上記の図2で「花鳥芳囀」を選択すると見られる頁 】



【 図II-3-8 図7の「花鳥芳囀」画像アイコンから行ける頁 全丁閲覧可能 】



【 図II-3-9 図7の画像を拡大して見ることができる 】

(3) 源氏物語の注釈・講義録の文化資源化・まとめ

『源氏物語聞録』（湯浅兼通筆録／明和七年）と『花鳥芳囀』（土肥経平著／明和八年）の両書は、奥書を信用すれば、ほぼ同時代の成立である。しかしながら、その内容は対照的な部分もある。『源氏物語聞

録』は、五冊九帖、「桐壺」から「葵」までを収め、儒者として藩に仕えていた那波魯堂の『源氏物語』についての講釈を藩医であった湯浅兼道が筆録した内容が中心となる。この講義録の中には、多くの独自注があり、京の文化や建築を知らない地方武士のために、身近なわかりやすい例が示され、言葉の正しい読み方、発音の仕方への言及等が見られる。『源氏物語聞録』には、物語の世界、あるいは貴族社会への強い憧憬があり、一方で実生活との懸隔も感じられたが、貴族たちを歌の師とでき、六度は京へ上ったとされる土肥経平の『花鳥芳囀』に、そのようなものは感じられない。ただし、『花鳥芳囀』には、物語以上に、堂上の注釈そのものへの興味が窺われ、それもある意味、武士階級特有の物の見方が示されていると言えるかもしれない。

江戸時代中期には、様々な学派が勃興し、『源氏物語』の注釈も、荻生徂徠による古文辞学派の影響を受けた真淵や宣長といった新注への流れがある中、彼ら地方武士たちが、依然旧注を規範とする理由には、著者の信条に則った意識的な選択があったと考えられる。また貴族社会の産物であった『源氏物語』が、「武士」という支配階級の上層部にいる彼らの学問対象——儒教的心得や和歌を学ぶ書として位置づけられ、彼らの憧憬の対象となっていたことは、改めて天皇制や貴族文化とかかわる物語テキストの意義を考えさせるものであった。今回、このような貴重な注釈書をデジタル化し、公開できたことは、大きな成果だと考えている。

(4) 源氏物語テキスト内の「こころ」表現について

① 『源氏物語』の立后と皇位継承の変容

『源氏物語』は、主人公・光源氏と女性たちとの恋愛が注目されるが、物語の皇統の描き方に、テキスト内の「こころ」表現の変化を読み取った。物語では、たびたび立坊をめぐる争いが示唆されながらも、それを避ける方向で展開するとし、それが現実の「立坊争い」（定子腹の第一皇子・敦康親王と彰子腹の第二皇子・敦成親王）に配慮した可能性があったこと、さらに物語では、立坊争いではなく、立后争いに焦点をあてる意味について、平安時代の歴史との比較により考察した。

たとえば史上の立后は、令に定める「嫡妻」の意義よりも、むしろ次代の皇太子の「母」としての意義を以て、皇位継承の行方と深く関わり続けていく。そのため安定した直系継承が続けば皇后の存在は不要となるが、東宮の夭折という皇統の危機に際して再び立てられるようになり、さらに皇位の兄弟継承によって出来た天皇権威のゆらぎ、また皇位継承の不安定化によって、帝の権威やキサキの立場を強化するような立后が見られるようになる。

物語の立后も同様の意味を持ち、藤壺や斎宮女御の場合のような立后争いを経ての中宮冊立には、次代の正統な皇位継承者を定め、帝の権威に資する後の役割が示された。ただし明石女御の立后については、直接、皇位継承や帝の権威と関わる形ではなく、むしろ立后後のあり方が注目される。特に東宮候補の匂宮への諫めや、第一皇子を産む中の君への対応など、次代の皇位継承を見据え、その行く末をサポートする役回りを果たす。

このような明石中宮と皇子たちの有りようについては、一条朝における幼い后たち（定子・彰子）の登場と、二后並立に象徴される政治権力の具にすぎない現実の后に対し、あえて物語の中で理想の后が描かれた可能性について明らかにした。皇位の継承が後の冊立と深く関わるだけでなく、物語が立后争いを焦点化した所以がここにあると考えた。またこれまで直接的に立坊争いを描いてこなかった物語が、

宇治十帖から新たに八の宮の存在を語る理由は、彰子が育てる皇子たちの未来に配慮し、現実の複雑な皇位継承、及び天皇と藤氏との政治的駆け引きにより生み出される八の宮のような存在を回避し、そして認識していくこと、いわばそのような人々の心情まで掬い上げる物語の新たな方法が示されていると結論づけた。上記の考察は、『源氏物語』の立后と皇位継承—史上の立后・立坊例から宇治十帖の世界へ』（『中古文学』98, 2016年12月）に発表し、著書『源氏物語の史的意識と方法』（新典社, 2018年1月）に所収した。

② 『源氏物語』 「心の鬼」の語について

『源氏物語』には、「心の鬼」という言葉が十五例見られる。この語のありようについて、平安時代の用例をたどりながら、特に「鬼」表現の変化にも注目し、考察した。「心の鬼」の語は、『源氏物語』以前の文学作品では、歌集や日記に数例あるのみで、一作品にこれだけの用例数をもつものは他に見当たらない。物語の特性を解明する上でも、重要な鍵語となる可能性が高いと考え、考察を試みた。

先行研究において「心の鬼」は、主に「疑心暗鬼」や「良心の呵責」の意味で理解されてきたが、近年は『和名類聚抄』の記述にある鬼の原義（「鬼」を「隠」の転訛とみる）を重視し、「見えないもの」「心に隠しておきたいもの」「人に知られたくないもの」といった解釈がなされている。このように、比較的広義な解釈がなされているのは、各用例で意味が揺れており、包括的に意義づけることが難しいためであろう。とはいえ、「心の鬼」が「心」の暗部を意味し、自分の意のままにできない「心」をまず「鬼」として認識する営みであることは確かである。「王朝人の内省的な視線から生まれた言葉」、また「特に自己の心の内部を追求する女流作家の作品にふさわしい言葉」とみる説などは、自らの心を見つめる語として「心の鬼」を位置づけている。さらに、『源氏物語』においては、この語が「密通」や「もののけ」（実体としての鬼）の事象と結びつき、人物たちの心の闇を効果的に表す例もあると見通しを立てた。

検討の結果、物語以前に見られる「心の鬼」は、用例が少ないものの、主に男女間に関わる女性の「心の暗部」を示し、女性自身が意識する場合は、特にそれを他律的なものとして切り離したい思いが見えた。

「心の闇」を「鬼」のせいにするわけではないが、『源氏物語』に描かれる高貴な女性たちの心に生じる「鬼」との共通点が窺える。また元々の「鬼」の例については、平安期以前から確認できる「神と対比される存在」「異形のもの」「人を喰らう存在」の他、『和名類聚抄』に記されるような「見えないもの」「隠れているもの」という特徴が明確であった。これらの特徴は、「見えない心」との同化を進めることとなるが、『うつほ物語』や『枕草子』において、作品の特徴を表すほど「鬼」の用法が広げられたことは重要である。特に、高貴な人物たちも、情のない人は「鬼」と言われていることについては、心に「鬼」を宿していく高貴な人物の登場を予感させる。中でも深窓の姫君が隠れている「鬼」と喩えられることも、その違和を越えて鬼と女性とを結びつける。また和歌で詠われるように、見える「鬼」は被えても、見えない「心の鬼」は追いやりようがない、という認識は、『源氏物語』においては、己の「心の暗部」（闇）を認め、それを抑え込む、もしくは逃れたい、という葛藤を描くことにつながっていく。絵として描かれる地獄の獄卒の鬼も、「心の鬼に」（心の鬼のために）自身が苦しむ、追いつめられる、という物語のあり方と関わる可能性があるだろう。

また『源氏物語』における用例の検討では、密通事件ともののけ、この大きな二つのテーマを描くにあたり、効果的に「心の鬼」の語が女性の心中に配されていることを確認した。「鬼」自体は、基本的に

主人公の生活圏外に発生するものの、「心の鬼」は都にいる高貴な人々の心内に生じて留まり、当人を苦しめる。そのことは、主に語り手によって語られ、あるいは、他者により「心の闇」を見透かす形で記述される。物語では、密通事件とものけ事件が、ともに繰り返し描かれるが、それら物語の質的差異が、「心の鬼」の語によって示されていることを確認した。

以上の考察については『源氏物語』の「心の鬼」―「鬼」の表現をめぐって(『古代学研究所紀要』第27号, 2019年2月)と題し、発表した。

(5) 源氏物語テキスト内の「こころ」表現について・まとめ

以上、『源氏物語』テキスト内の「こころ」表現について、歴史的見地と、表現論的見地の2つの方法により「古代人のこころ」のありように迫るべく考察した。歴史的見地から、物語の皇位継承と立后について考察した内容は、物語がいかに同時代の人々の「こころ」に配慮し、その理想や目標となるべき指針として練られたものであったかを明らかにできたと考える。『源氏物語』は、成立当初から、藤原道長という権力者の庇護を受け、時の天皇(一条天皇)や一級の男性知識人(藤原公任)に読まれていた物語であった。作者が紫式部であることをほぼ確定できるのも、これまでの作者不明の物語とは全く異なる位相にあり、その意義についても、同時代の読者の「こころ」とより密接に関わることを考えるべきであろう。また表現論的見地から考察した「心の鬼」の語については、物語の大きなテーマと言える「密通とものけ」のあり方、その変容を示すにあたり、物語の要所に効果的に配されていることを確認できた。特に「鬼」は、主人公の日常生活圏から外れたところに多く登場するのに対し、「心の鬼」は、最も高貴な女性(藤壺や六条御息所)の心中表現に用いられ、その深刻な状況が如実に表されている。本心を押し殺し、それが抑えきれなくなったとき、「ものけ」となってさまよい出す―そのプロセスを表現すべく、「心の鬼」の語が巧みに用いられているのである。当時の貴族たちの「こころ」のありようは、現代人に通じるころもあり(夕霧が嫉妬する妻・雲居雁を「鬼」と称する)、また逆に「恥」の意識による貴族特有のこころの持ちようを示す場合もあるが、総じて「古代人の心」の一端を明らかにできたと考える。

(湯浅 幸代)